人と自然と文化にやさしい地域づくり

令和２年　No.1296

山口県教育

Education of the Yamaguchi prefecture

2

明日を拓く ―成果を検証する―

平成30年度　第71回山口県学校美術展　推奨作品
『ココロパレット』
山口県立徳山高等学校　３年生（受賞時）　前田　智咲

■シリーズ「郷・協・興 ③」

◎令和元年度「やまぐち教育の日」協賛行事を紹介します

山口県十種ヶ峰青少年自然の家
山口県立田布施農工高等学校
山口県立萩総合支援学校
美祢市立大田小学校

◎ふるさとで学ぶ　山口大学大学院教育学研究科（教職大学院）
教職実践高度化専攻 教育実践開発コース
２年　川端　寧々
山口県立大学　看護栄養学部栄養学科　３年　笠本　光希
山口学芸大学教育学部　４年　金子　早希
梅光学院大学　子ども学部　子ども未来学科　４年　畑中　智尋

■現職研修助成事業

周防大島町立安下庄中学校	教諭	齋藤　彰宏
岩国市立由西小学校	教諭	小嶋三保子
周南市立三丘小学校	教頭	小川　明子
下関市立宇賀小学校	教諭	品川　美紀
宇部市立万倉小学校	教諭	松永　早織
下関市立勝山小学校	教諭	横沼　一志

あなたのアクションは…

山口県教育会がすすめる
「元気やまぐち」三つのアクション

◎あいさつ 返事で 明るいやまぐち
◎笑顔でつなぐ 安心やまぐち
◎ゴミ 落書きのない 美しいやまぐち

一般財団法人　山口県教育会

〒753-0072　山口市大手町２－18　TEL 083-922-0383　FAX 083-922-5768
URL http://www.ykyoikuk.or.jp　E-mail ykyoikuk@ruby.ocn.ne.jp
明治36年4月第１号　毎月１日発行　発行人　会長：倉増誠彦／編集長：山本晃久

令和元年度「やまぐち教育の日」協賛行事を紹介します

第18回やまぐち教育の日・第47回教育県民大会柳井大会において72行事を紙面紹介しました。

食欲の秋！とりたて野菜で「力鍋」

公益財団法人山口県ひとづくり財団　**山口県十種ヶ峰青少年自然の家**

秋野菜でふれあおう！

阿東嘉年地区の農家を訪ね、家族で野菜の収穫を体験しました。また、収穫した野菜を使って、阿東嘉年の郷土料理「力鍋」を作ったり、落ち葉を集めて焼き芋を焼いたりしました。その後、みんなで食べながら、家族や地域の方々との交流を深めました。

日　時：令和元年11月２日(土)
　　９:30～15:00
会　場：山口県十種ヶ峰青少年自然の家
参加者：年中児～小学２年生児童とその家族（25名）

嘉年「力鍋」のできあがり♪

たくさんの野菜が収穫できました

きれいに洗おう

いただきます

初めて包丁を使います

焚火で焼き芋もつくりました

農　工　祭

山口県立田布施農工高等学校

令和に咲かせ　僕らの命　笑顔はじける農工祭

生徒の専門教科および生徒会・部活動等における学習成果を総合的に発表しました。さらに地域との連携を一層深めるために、地域の方々をこの行事にお招きし、学校の現状や学習活動への関心と理解を深めていただきました。

日　時：令和元年11月16日(土)
　　９:00～13:00
会　場：山口県立田布施農工高等学校
参加者：約2,700名

ロボットアメフト操作体験講座

学習成果の展示

実習生産物の販売

吹奏楽の演奏

環境土木科３年生製作の庭園

保健委員会による血圧測定

シリーズ「郷・協・興③」

第38回 萩総まつり

山口県立萩総合支援学校

令和初　みんなで盛りあげよう　萩総まつり

児童生徒の平素の学習成果の発表と特別支援教育への理解を深めていただくことを目的として実施しています。毎年、地域の方々や大学生、高校生にもボランティアとして数多く参加していただいています。各学部や長門分教室のステージ発表、全児童生徒による民舞「荒馬」、児童生徒の作品販売も好評をいただきました。

日　時：令和元年11月17日(日)
　　9：15～14：25
会　場：山口県立萩総合支援学校
参加者：約450名

小学部ステージ発表

民舞「荒馬」

「荒馬」全員でフィナーレ

児童生徒の作品販売コーナー

バザーコーナー

地域の中学生によるゲームコーナー

親と子の勉強会

奈良の大仏と長登銅山　～大田太郎の旅行記～

美祢市立大田小学校

人や自然・文化との関わりを深めよう

PTA総務部とカルチャーアート部を中心に、これに教職員有志が加わったTeam「harmony」による上演です。ふるさと美東の歴史的出来事を伝えるとともに、これを家族の語り合いのきっかけにして、美東の良さを確かめたり再発見したりすることにつなげてほしいと願った取組です。

日　時：令和元年10月17日(木)
　　14：50～15：40
会　場：美祢市立大田小学校体育館
参加者：約150名

さあ、練習開始！

めくりのタイミングが大切です

大仏博士、登場！

僕が主役です

届け、長登の熱き思い！

いよいよ本番、熱演中！

今日が、最高のハーモニー！

ふるさとで学ぶ

人

山口大学大学院教育学研究科（教職大学院）
教職実践高度化専攻 教育実践開発コース
二年　川端　寧々

四月から山口県の小学校教員として働く。どんな子どもたちと出会うのだろうか。どんな先生方と一緒に仕事ができるのだろうか。そんなことを考えるとワクワクしてくる。

私にとってのふるさとは「人」だと思っている。出会い、関わりを深め合える人がいるところがふるさとになる。それぞれのふるさとで子どもたちには伸び伸びと育ってほしい。

子どもが「今、幸せ」と感じる学校生活や学習を実現できる小学校教員になることを目指して山口大学教職大学院に入学した。院での授業と週二日間の学校実習を通して授業観や子ども観、授業づくりの基礎基本を実践的に学んでいる。「日本や山口県の将来を担う子どもを育てる仕事を一緒にしたい」そう思える仲間と出会うことができた。頼れる先輩教員や大学の先生方と出会うことができた。今後への大きな財産になる。

院での授業は、知識を蓄積するというよりは、これまでの学習経験や新たに学んだことをもとに互いの考えを出し合って考えを深める学習活動が多い。学校経営コースの現職の先生方と一緒の授業では、より実践的な事例に数多く触れる機会が多いので学校を近く感じることができる。

実習校では、一週間おきに出会う度に子どもたちが成長している。その事実を生み出している担任の先生や学校の取組から多くのことを学ぶことができる。そして今、学校で求められているのは「人」であるという思いを強くしている。子どものやる気を引き出す人、子どもが憧れる人、子どもに安心感を与えることのできる人。私もそんな教員になりたい。週に2日しか出会わない私に「寧々先生がいると安心する」と言ってくれる子どもがいる。一生の宝物にしたい言葉だ。これから出会う子どもたちからもそう言ってもらえるような小学校教員になれるよう努力を重ねたい。

実習校での授業の一コマ

多くの繋がりの中での学び

山口県立大学
看護栄養学部栄養学科
三年　笠本　光希

現在、栄養学科で栄養教諭を目指し、日々学んでいます。私は、大学生活の中で多くの繋がり・縁を感じることができました。ふるさとである山口県で、将来の夢に向かって学べていること、このことも何かの縁なのではないかと感じています。

私は、栄養学科の課外活動である「食育プログラム開発チーム　食育戦隊ゴハンジャー」に所属しており、地域の子どもたちの心に届く食育活動を目指して活動を行っています。この夏には、企画リーダーとして地域の幼稚園にて、三色食品群についての食育プログラムを行いました。子どもたちが楽しみながら食について考えることができ、家庭にも繋げていけるようなプログラムを作るために、メンバーと共に試行錯誤を繰り返しました。苦戦することも多くありましたが、子どもたちの笑顔、好き嫌いせずに食べるといった感想が見られた時、本当にやりがいを感じ、より多くの子どもたちに食育がしたいと思うようになりました。

また、よさこい部として、地域のイベントに出させていただいたり、お祭りの企画から運営をさせていただいたりもしました。支え合えるかけがえのない仲間に出会い、地域を含めた多くの繋がりを通して、普段気づくことができないような身近な縁に気づくことができました。よさこい部での経験は、間違いなく私の人生の糧になっていると感じています。

食は一生付き合っていくものであり、健康に過ごすためには欠かせないものです。だからこそ、食べることができるまでの多くの繋がりに気づき、バランスよく食事ができるような食育を行っていくべきだと思います。多くの繋がりに気づかせてくれたこの山口県で、栄養教諭になれるよう、今後も日々努力していきます。

「食育戦隊ゴハンジャー」による食育プログラムの実践

地域の子どもたちから学んだ四年間

山口学芸大学教育学部
四年　金子　早希

私は、これまでたくさんの地域の方々に見守られ、支えられ、ここまで成長することができました。そこで今度は、私が教師になることで故郷である山口県に恩返しがしたいと思い、小学校教員を目指すことにしました。

そのため、大学が休みの際には、母校の学生支援委員のボランティア活動に積極的に参加させていただきました。この活動を通して、学級経営や授業づくりなど多くのことを学ぶことができ、成長しました。また、特別な支援を必要とする子どもたちとの触れ合いは、「教育の土台」について熟考する機会にもなりました。

教育実習やボランティア活動の場として、母校の小・中学校に行かせていただいたため、有難いことに、小学生から中学生になった子どもたちの成長を目の当たりにすることができ、成長する人間の土台を形成する小校教育の意義深さ、中学校との連携の大切さ、地域連携教育の素晴らしさを学ぶことができました。

子どもたちの成長や頑張っている姿は、私にとって良い刺激となり、私を成長させてくれました。また、「先生久しぶり」と声をかけてくれる子どもたちから何度も元気づけられ、私は、大人の方々だけでなく、子どもたちにもたくさん支えられたのだと実感することができました。私にたくさんのパワーをくれた子どもたちに、今度は私が教師になって、パワーを送ることができるよう、子ども一人ひとりとかかわり合える教師になりたいと思います。

これらの経験から、私は、「やまぐち型地域連携教育」にとても魅力と可能性を感じています。大学で学んできたこと、地元で教師になるために学んできたことを現場で生かせるよう、今後も精進していきたいと思います。

教育実習にて（社会科授業の一コマ）

山口県にしか咲かない花

梅光学院大学
子ども学部　子ども未来学科
四年　畑中　智尋

私は、小学校卒業まで県内で過ごし、中学校・高校は地元を離れ大学で再び山口県に戻ってきました。

大学では、チャレンジ精神を持ち、フィリピンの短期留学で他国の子どもと触れ合ったり、UNGLという他大学の学生と共にリーダーシップについて学んだり、また、下関海響マラソンに出場し四年連続完走したりと自己研鑽に努めました。自分とは違った価値観を持った人々と出会うことでこれからの人生を切り拓いてくためには、多様な人々と関わることが大切だと強く感じました。このような経験を経て、無事教員採用試験に合格することができました。

私の次の目標は、「山口県にしか咲かない花」をたくさん咲かせることです。「山口県にしか咲かない花」とは、山口県の歴史・風土によって育てられた子どもたちの夢や目標が叶った時の姿です。その花を咲かせるためには、種、すなわち夢や目標を見つけるきっかけが必要です。その種は、多くの人との出会いの中で見つけることができます。山口県では、そのきっかけをコミュニティ・スクールなどによって、数多く見つけることができます。私も、今まで多くの人々との出会いの中で目指す理想を描き出し、芯をしっかりもつことで自分の道を切り拓いてきました。これは、学校・家庭・地域や関係機関が連携を大切にしている山口県だからこそできたことです。また、一度地元を離れた時に、地元の方々の温かさが、自分にとってとても大切なものであると気付きました。このように、人が温かいのも山口県ならではのよさです。

教育実習や学校ボランティアで、子どもが困っている友達を助ける姿、できた時に喜びを分かち合っている姿などを見て、私もとても幸せな気持ちになりました。そんな素敵な子どもたちと「山口県にしか咲かない花」を咲かせていきたいです。

子どもの視線を受ける（教育実習にて）

学校研修

一人一台タブレット端末を活用した学習展開

周防大島町立安下庄中学校
教諭　齋藤　彰宏

本校では今年度、生徒数の減少に伴い、以前導入していたタブレット端末が生徒一人一台利用できるようになった。そこで、山口県教育会からの助成を生かし、生徒がタブレット端末を活用し、一人一人の学習効果を高めるための研究と実践を試みている。

朝の10分間の学習時間を活用し、全校でドリルアプリにより基礎的な内容の定着を図っている。国語の漢字や社会の用語、英単語など、各教科で曜日を決め、練習問題アプリに挑戦している。なかでも、英語の単語ドリルでは、綴りと意味だけではなく、発音も確かめることができ、有意義な学習の確認になっている。アプリで内容を選ぶと問題が次々に５問程度出題され、それぞれ正誤が表示されるため、短時間でいくつもの問題に取り組むことができる。また、自分用の端末には、どこまで進んだか、どの問題を間違えたかなどの記録が残るため、各自が自分のペースで進めることができ、何度も挑戦することができる。

授業においても、なるべく多くの場面で有効な活用方法について試みている。理科の学習では、実験の様子を自分たちで撮影し、何度も詳しく観察することができた。また、技術科の学習では、簡単なプログラミング学習ができるゲーム的アプリを利用し、物事を順序立てて考える実践を行った。総合的な学習では、各自がインターネットで調べ学習したものを、そのまま電子黒板につないで提示し共有した。

珍しさからタブレット端末の利用に生徒が興味をもち、意欲的に取り組んでいる様子も見られるが、さまざまな場面で活用する中で、端末の利用が珍しいことではなく、便利な道具として扱えるよう活用していきたい。

今後も実践を重ね、効果的な使い方の研究やより使いやすいアプリの導入などを考えていくことで、より生徒にとって有効に活用できるよう研修を進めていきたい。

タブレットで学習する生徒

学校研修

地域の中に学びの場を求めて

岩国市立由西小学校
教諭　小嶋　三保子

本校は、全校児童数７名の完全複式（２学級）の小規模校です。地域では「子どもは地域の宝」と、地元のボランティアグループが中心となって本校の教育活動を支援してくださっています。

今年度は「第68回全国へき地教育研究大会長野大会」での実践発表を控えていたことと、地域の願いや支援に答えるために、研究主題を「ふるさと由西を愛し、地域の中で豊かに学ぶ子どもの育成」と設定しました。そして、主題解明に向け、３つの活動を柱として実践を積んできました。

ここでは、実践の一端をご紹介いたします。

○**地域を知る**……子どもたちは、自分たちが住んでいる地域の事は意外と知らないものです。そこで、「ふるさと」を考える第一歩として、地元の方を講師とした「歴史探訪」を実施しました。

○**地域と関わる**……由西小学校は、平成５年から地元の伝統芸「笠塚神楽」の継承活動に取り組んでいます。月一回の活動を教育課程の中に位置づけ、地元の神楽団の方に指導していただいています。

○**地域を考える**……本校は、かつて蛍の養殖と由宇川への放流に取り組んでいた時期もあり、蛍との関係は深いです。そこで、蛍と由宇川との関係を水質という側面から考えようと、地元“ミクロ生物館”から講師を招いての水生生物採取と分類を行い、まとめました。

由宇川の水生生物調査

３つの柱を軸とした実践は、子どもたちにとっては地域の再発見、教師にとっては新たな地域財の発掘へと繋がり、充実した一年となりました。

今回の実践は、11月に開催した「開校140周年記念行事」の中で、「子どもたちが描く未来の由西」と併せて卒業生や地域の方々に発表しました。

３学期には、地域財を活かした学習に取り組んでいる学校視察等に、現職研修助成事業を活用させていただきます。児童の学びをより深めていくには、どのような指導を行っていけば良いか、全教職員で更に研修を積んでいきたいと考えています。

学校研修

ドラムサークルで広がり育つ コミュニケーション力

周南市立三丘小学校
教頭　小川　明子

本校は、全校児童44名、単式２学級、複式２学級の小規模校である。学習の中で地域の方々と関わる場面は多いが、新たな出会いは少ない環境にある。このような中で、コミュニケーション力を高めていくために、言語そのものを鍛えるだけでなく、非言語の部分にも視点をあてて取り組むこととした。本年度は、山口県教育会からの助成を得て、非言語的コミュニケーションとして、ドラムサークルに視点をあて研究を進めている。

ドラムサークルとは、リズムによりコミュニケーションを図る活動であり、「間違い」は存在しない。全てを受容し参加者全員で楽しむ活動である。

ドラムサークル実施後の児童の感想では、いつも全員が「とても楽しかった」と答えている。理由として、「失敗がないので遠慮せず自由に叩ける」「みんなと一つになれる」を挙げている。

輪になって活動をするので、互いの表情を見ることができる。日頃口数が少なくおとなしい子が笑顔で楽しそうに叩いている様子を見て、友達の新たな面を発見したという児童もいる。児童は、ドラムサークルの楽しさを友達と共有するだけでなく、ドラムサークルを通じて友達の新たな面を発見できる楽しさをも感じ取っている。

ドラムサークルは、言葉によるコミュニケーションのように「共通の話題」を必要とせず、音やリズムがその役目を担っている。そのため、この活動は、学級内にとどまらず、学級の枠を超え、多様な学年や異年齢グループでも容易に取り組むことができ、その意義は大きい。

自分のリズムを叩きながら、他の人のリズムと調和していく。場の状況を瞬時に感じ取り、上手にすりあわせをしていく。まるで社会の縮図のような一面もある。多くの価値観が行き交う現代社会に適応していくための一方法として、ドラムサークルの手法を取り入れることにより、自己表現をしながら人とよりよい関係を築いていけるようになると考えている。

地域の人とドラムサークル

学校研修

「みんなで育てる宇賀っ子の育成」を目指して

下関市立宇賀小学校
教諭　品川　美紀

本校は「自ら学び、共に高め合う宇賀っ子の育成」を研究主題に設定し、「宇賀型課題対応能力」

- **他者を意識したコミュニケーション能力**
- **主体的・能動的に学ぶ力**
- **思考力・判断力・表現力**
- **自己効力感**　　**※宇賀型課題対応能力の４視点**

を育成するために、保護者や地域と共同歩調で研究に取り組んでいます。

その中で、「宇賀っ子を育てるしかけづくり」を「見える化」し授業改善に積極的に生かすため、効果的なしかけの在り方について検証しています。この「しかけづくり」では、各種思考ツール、ＩＣＴ機器の利活用及び児童一人一人が学びに向かう姿勢などを整理・統合しながら、公開研究授業を基に協議・検討・改善を行っています。そして、「宇賀型課題対応能力」の向上成果の現状を共有しながら、少人数ならではの全員参加型授業の構築を目指しているところです。

本年度、山口県教育会の現職研修助成事業を活用させていただき、成果物を見える化しながら資料としてまとめることで、教職員、保護者、及び地域の方々が一体となって児童に向き合う基盤づくりに一歩前進したと考えています。

また、児童に対しては、リーダー学習やガイド学習における基本型を示し、「自ら学ぶ」「共に高め合う」ためのステップアップマニュアルが作成できれば、次年度の「山口県へき地・複式教育研究大会」に向けて、より深い学びへの学習活動に生かせるものと期待しています。

ただ、実際的な取組は実践１年目であり、まだまだ試行錯誤の段階です。研修主任としての不安は大きいのですが、学校だけが児童の教育に関わるのではありません。今後も、保護者や地域と連携しながら児童の成長の歩みを見取り、「みんなで育てる宇賀っ子」を目指したいと思います。

ICT機器で見える化を促進する

個人研修

グローカルな人材を育成するために ～楠で育てる９年間の「学び」と「育ち」～

宇部市立万倉小学校
教諭　**松永　早織**

来年度、宇部市は全中学校区で小中一貫教育の取組が始まるため、本校を含む楠中校区で目指す子ども像や連携の具体策等について研究を進めている。今年度は、小中学校の研修主任を中心に、９年間を見据え各教科のつながりを大切にした教育課程を策定した。15の春までに育てたい子ども像を、学習面と生活面の２つの視点から発達段階を追って具体的に設定することができた。

今回の助成金で、京都市立東山泉小中学校の研究大会に参加させていただいた。同小中学校は、5・４制施設併用型義務教育学校であり、１中３小の中学校区で施設分離型小中一貫校である本校区と状況が類似する。同校の取組の中では、生活科から総合的な学習へとつながる教育課程に特徴があった。学校から校区へ、校区から市内へ、市内から市外へ、そして、日本、世界を意識した学習を９年間で系統立てて行われている。歴史や伝統に誇りを持ち、万倉の地に愛着をもっている地域の中で、グローカルな人材育成を目指す本校においてとても参考になるカリキュラムであった。楠中校区４校で作成した地域連携カリキュラムにおいても、小１から中３への系統性を意識している。その上で、小学校段階では地域の良さを知りつくし愛着をもつことが、外へ向かう視野を持ったグローカルな人材育成につながると考える。

今年度、本校の５・６年生は総合的な学習の時間で校歌から地域の伝統や歴史を知る学習を行った。地域の特産品である赤間硯は山口県の伝統工芸品であるだけでなく、中国の書家までも買い求めるほどの評価を得ていることを知り、地域の人材や文化財などに誇りと憧れをもつ姿が見られた。今後は、他方面へ発信する学習を計画している。

小学校段階での丁寧な取組が、中学校に入学して、地域清掃や校区運動会のボランティアなどの地域への関わりに積極的に貢献しようとする意欲へとつながっている。更に研修を深め、将来、子どもたちが万倉の誇れる文化財などを世界へ発信していく存在として活躍することを期待している。

赤間硯を学ぶ

グループ研修

教職員のキャリアを生かした 放課後自主研修（いどばた研修）の在り方

下関市立勝山小学校
教諭　**横沼　一志**

勝山小学校は、児童数750名の大規模校であり、様々なキャリアを積んだベテラン教師が多数勤務している。「いどばた研修（放課後自主研修）」では、そのような先輩教師に依頼をし、講義やグループワークを行っている。学級開きについての講義や、言葉を中心にした子どもたちへのアプローチ方法、学級経営の中心に読書活動を据え子どもたちの困り感に応じる方法など、多くのキャリアを積んだベテラン教師ならではの内容である。今後は版画の構図や彫刻刀の細かい使い方などの研修活動を予定している。

「いどばた研修」の魅力の一つとして、講義やグループワークが終わった後に、若手教師が、それぞれの学級での悩みなどを、気軽に相談できることがあげられる。この時間は、毎回の研修後、必ず実施している。日々の学校生活の中での子ども同士のトラブルの解決方法や、保護者対応など、若手教師の悩みは尽きない。相談したくても、他の教師も忙しそうで、なかなか声をかけることができない。そんな若手教師にとって、このような時間は非常に貴重なのである。

学習指導や生徒指導に関する内容だけでなく、教師としてのワークライフバランスについて考えることができるのも、大きな魅力である。今年度は、栄養教諭指導のもと、バランスのとれた献立を考え、実際に作るという活動に取り組んだ。その後の会食では、話がはずみ、笑顔いっぱいであった。これは、若手教師が調理実習の授業に自信をもって臨むことにつながるだけでなく、自らの食生活を見直すきっかけにもなる。健康的な食生活を習慣化することで、心も体も元気になり、子どもたちとしっかり向き合うことができる。

こういった活動を充実させることができるのも、山口県教育会の助成のおかげである。これから始まるプログラミング教育や外国語活動など、教師自身が学ばなければならないことは多い。今後も、本会の支援を受けながら、研修活動の充実に努めていきたい。

養護教諭を講師に子どもへのアプローチについて学ぶ